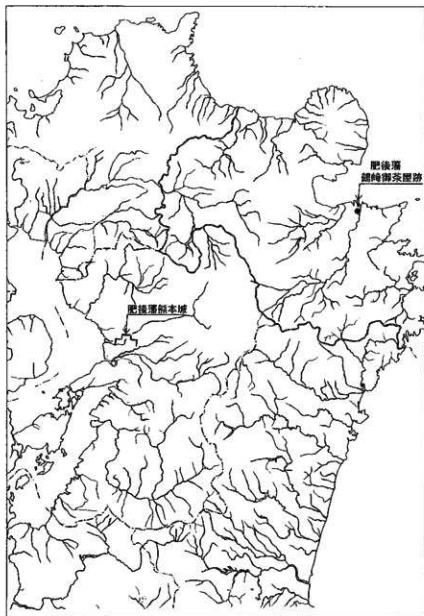


大分県立大分鶴崎高等学校普通教室棟改築に伴う調査

鶴崎御茶屋跡



2002

大分県教育委員会

鶴崎御茶屋跡

大分県教育委員会



1. 鶴岡御茶屋跡の遠景—南側の上空より



2. 鶴岡御茶屋跡の発掘地点の上空より



3. 高取系片口鉢 (側面)



4. 高取系片口鉢 (上方)



6. 1号井戸埋土からの青磁



7. 3号土坑内からの青磁碗



5. 高取水差蓋 (側面・上方・裏面)



8. 染付磁器 (側面)



9. 染付磁器 (裏面)



10. 2号土坑からの青磁碗



11. 京都系土師質皿



12. 京都系土師質皿



13. 二頭花紋付瓦質土器



14. 雷紋付豊後府内型火鉢



15. 瓦質の甕



16. 古銭 (B2区埋納ビット)



17. 古銭 (B2区埋納ビット)



18. 型造りの馬 (近世)



19. 唐津系陶磁碗



20. 土錐



21. 1号井戸人遺物の出土状況



22. 1号井戸完掘状況



23. B2区埋納遺構



24. B2区埋納遺構



25. 幕末期の難波全景図

序

今回、報告します鶴崎御茶屋跡は大野川河口部にあり、この御茶屋は江戸時代のはじめに肥後藩の加藤清正によって設けられたと伝えられています。その後、鶴崎が細川氏の領地となってからも御茶屋は地域支配の拠点として、また参勤交代途上の宿所として重要な施設でした。

鶴崎御茶屋跡は現在大分県立大分鶴崎高等学校や大分市立鶴崎小学校などの文教施設として利用されています。このたび、大分県立大分鶴崎高等学校の普通教室棟の改築が計画されましたが、大分県教育委員会では工事の実施に先立ち、予定地に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果、室町時代に大友氏が活躍していた頃の土器埋納遺構や、江戸時代のはじめに肥後藩主加藤清正・忠広が御茶屋を置いていた頃の井戸や溝が発見されました。この調査によって多くの貴重な資料を得ることができ、このたび報告書として刊行することになりました。本書が先人の残した歴史遺産を将来守り伝えていく契機となれば幸いです。

最後に発掘調査・報告書作成に御協力いただきました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成14年3月29日

大分県教育委員会教育長

石川公一

例 言

1. 本書は、平成12年度に大分県教育委員会が大分県立大分鶴崎高等学校普通教室棟改築にともなって調査を行った鶴崎御茶屋跡の発掘調査報告書である。
2. 調査組織
 - 調査主体 大分県教育委員会
 - 田中恒治（教育長）
 - 山本芳直（文化課長）
 - 調査員 綿貫俊一（文化課埋蔵文化財第2係主査）
 - 東保春奈（同 嘱託）
 - 平野真由美（同 嘱託）
 - 五十川雄也（同 嘱託）
3. 遺物の整理作業は大分県教育庁文化課資料室で行った。
4. 遺跡・遺物写真は各調査員が撮影した。
5. 遺構の実測は各調査員が行った。
6. 遺物・写真・実測図等は大分県教育庁文化課資料室で保管している。
7. 本書の編集・執筆は綿貫俊一が行った。
8. 本書に用いた方位は真北である。

目 次

巻頭図版

序 文

例 言

第1章	はじめに	1
	1. 調査に至る経過	1
	2. 鶴崎御茶屋跡周辺の歴史的背景	1
	3. 鶴崎御茶屋跡の立地・環境	4
第2章	遺構と遺物	4
	1. 遺構	4
	2. 遺物	12
第3章	まとめ	16
巻末図版		17

挿 図 目 次

第1図	鶴崎御茶屋跡と周辺遺跡分布図	2
第2図	鶴崎御茶屋跡位置図	3
第3図	発掘調査区位置図	4
第4図	鶴崎御茶屋跡遺構配置図	5・6
第5図	B2区・C2区周辺遺構実測図	7
第6図	C2区東側・C3区西側遺構実測図	7
第7図	D2・D3・E2・E3区周辺遺構実測図	8
第8図	1号溝・2号溝断面実測図	9
第9図	1号井戸実測図	10
第10図	G3・H3区付近遺構実測図	11
第11図	土師質土器実測図	11
第12図	陶磁器・その他の遺物実測図	13
第13図	B2区埋納ピット	14
第14図	鶴崎御茶屋跡内からの土錐	15

表 目 次

第1表	陶磁器及びその他の製品の観察表	15
-----	-----------------	----

巻頭図版目次

1. 鶴崎御茶屋跡の遠景—南側の上空より
2. 鶴崎御茶屋跡の発掘地点の上空より
3. 高取系片口鉢（側面）
4. 高取系片口鉢（上方）
5. 高取系水差蓋（側面・上方・裏面）
6. 1号井戸埋土からの青磁
7. 3号土坑内からの青磁碗
8. 染付磁器（側面）
9. 染付磁器（裏面）
10. 2号土坑からの青磁器
11. 京都系土師質皿
12. 京都系土師質皿
13. 二頭花紋付瓦質土器
14. 雷紋付豊後府内型火鉢
15. 瓦質の甕
16. 古銭
17. 古銭
18. 型造りの馬（近世）
19. 唐津系陶磁碗
20. 土錐
21. 1号井戸人遺物の出土状況
22. 1号井戸完掘状況
23. B2区埋納遺構
24. B2区埋納遺構
25. 幕末期の鶴崎全景図

巻末図版目次

- 写真1. 発掘区全景（西から）
- 写真2. 発掘区近景（東から）
- 写真3. 発掘調査風景
- 写真4. 発掘調査区近景
- 写真5. 左2号溝、右1号溝（北から）
- 写真6. 1号溝南側断面
- 写真7. 2号溝南側断面
- 写真8. 3号溝と2号井戸
- 写真9. 3号井戸の遺物出土状況
- 写真10. 3号井戸の遺物出土状況
- 写真11. B2区土師器埋納ビット
- 写真12. B2区土師器埋納ビット
- 写真13. 1号井戸の完掘状況
- 写真14. 鶴崎御茶屋跡B2区埋納ビット
出土銭X線写真

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

大分県の政治・経済の中心地である大分市は人口44万人を数え、中核都市として大きく変貌しつつある。そうした背景の中で、郡部での人口の減少とは裏腹に、人口の増加とともに多くの小・中・高校が建設されてきた。時間の経過と共に、老朽化も進んできたようである。大分県立鶴崎高等学校もその例にもれず、各所で校舎の傷みが目立っている。とりわけ北東隅の校舎は傷みがひどい状況であった。このような状況から大分県教育委員会は、この校舎の改築を計画した。

高校敷地付近は「鶴崎御茶屋跡」として周知されており、中世・江戸時代の遺跡として知られていた。このため大分県教育委員会では遺跡の遺存状態を知るために、平成12年12月に試掘を行った。この結果、御茶屋の跡、もしくは中世段階のものと見られる遺構が部分的に削られているものの、広い範囲で遺存していることがわかった。これを受けて、大分県教育委員会は平成13年1月9日から平成13年2月13日まで本調査を実施した。

2. 鶴崎御茶屋跡周辺の歴史的背景

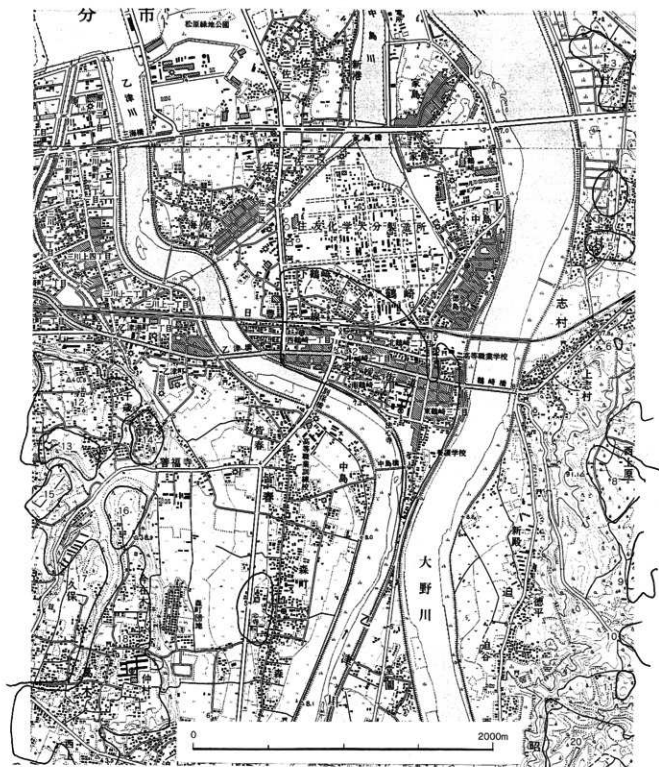
鶴崎御茶屋跡辺りで最も古い遺跡として知られるのは、東に大野川を挟んで約1.2km地点にある南北に長い丹生台地の遺跡群である（第1図）。ここからは、旧石器時代後期に属するナイフ形石器・角錐状石器などが見ついている。同様な遺物は鶴崎御茶屋跡の西、乙津川を隔てた約1.8kmにある地藏原遺跡・尾崎遺跡からも見ついている。これらは付近の礫層で採取可能な流紋岩を石材としている。

縄文時代の遺跡としては鶴崎御茶屋跡から南西へ約4kmの乙津川を隔てた横尾貝塚遺跡がある。ここでは縄文時代前期と後期を中心とした遺物と大量の貝が見ついているが、近年では縄文時代後期のドングリを入れた貯蔵穴群が見つかった他、アカホヤ火山灰層の下の層から縄文時代早期末から前期初頭の建築部材と籠に入れた姫島産黒曜石の剥片類が見ついている。

弥生時代になると遺跡が急増する。鶴崎御茶屋跡から西の乙津川を隔てた猪野丘陵では、前述の地藏原遺跡・尾崎遺跡や米竹遺跡・北の崎遺跡など、弥生時代中期・後期を中心とした多くの遺跡が点在している（第1図12～18）。古墳時代の遺跡としては、前方後円墳3基・円墳5基からなる野間古墳群が東方の丹生丘陵にある。また丹生丘陵の北部段丘崖には屋宗横穴墓群（第1図6）、集落遺跡としては鶴崎御茶屋跡の南方約5.3kmの乙津川左岸自然堤防上で6世紀代の住居跡64棟などがみつかった毛井遺跡B地区がある。

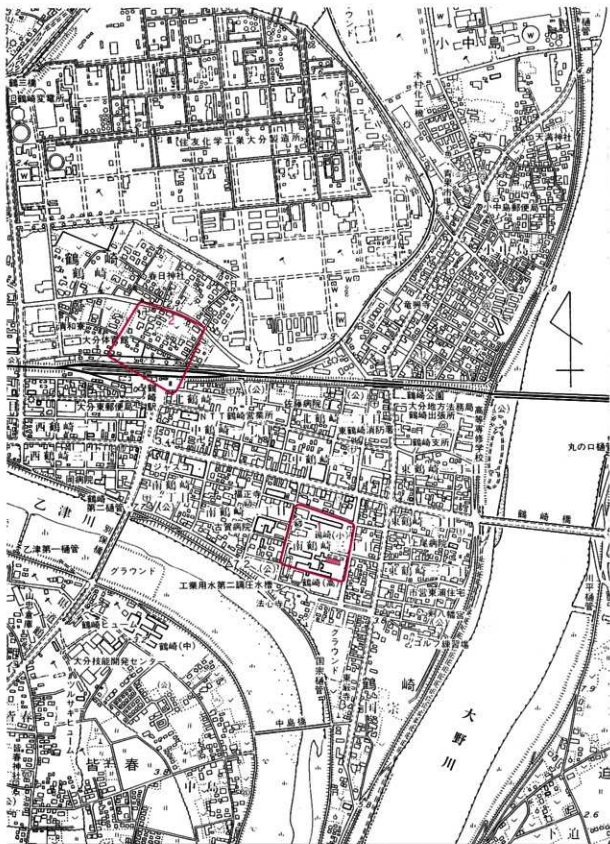
奈良時代に入るとこの辺りは豊後国海部郡に入り、丹生郷、または判田郷に属する。またこのあたりは中世鎌倉時代に入って高田庄となり、大友氏が進出したと考えられる。明確に古文書に鶴崎が見えるのは、天正14年の古文書である。中世高田庄は豊後刀の産地でもある。そしてこの頃より大友系の野津氏の本家である吉岡氏（本貫地は野津町吉岡）が支配するようになり、このときの居館が「御屋敷」と呼ばれる鶴崎城跡である（第2図2）。この鶴崎城に関連する詰めの城が千歳城跡である（第1図14）。

安土桃山時代末の慶長6年（1601）になると、ここ鶴崎付近は肥後藩加藤清正領となり、江戸時代の元和4年（1618）加藤忠弘によって城下町形式に地割がされたと伝えられる。この際に御茶屋が造られたとみられる。寛永9年からは細川氏が肥後藩の近世大名として一帯を統治するようになる。



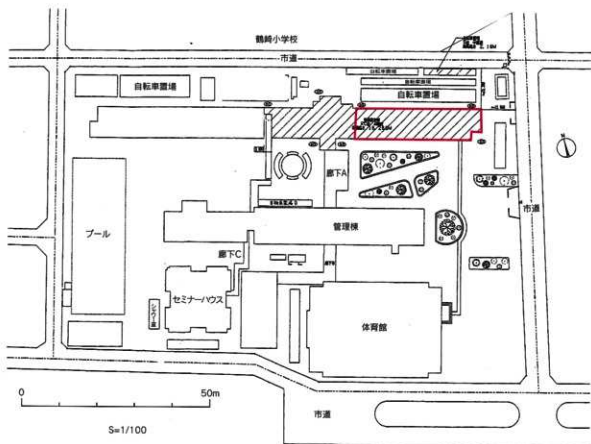
- | | | | |
|-----------|------------|------------|----------------|
| 1. 鶴崎御茶屋跡 | 6. 屋架橋穴遺群 | 11. 清水ヶ池遺跡 | 16. 北の崎遺跡 |
| 2. 鶴崎町遺跡群 | 7. 西上ノ原北遺跡 | 12. 米竹遺跡 | 17. 榎野遺跡 |
| 3. 北遺跡 | 8. 上ノ原北遺跡 | 13. 地蔵原遺跡 | 18. 墓木遺跡 |
| 4. 天満宮裏遺跡 | 9. 東上ノ原遺跡 | 14. 千歳城跡 | 19. 尊徳寺遺跡 |
| 5. 下志村遺跡 | 10. 阿邊跡 | 15. 尾崎遺跡 | 20. 丹生遺跡群 B北 |

第1図 鶴崎御茶屋跡と周辺遺跡分布図



1. 鶴崎御茶屋跡
2. 御屋敷字屋形

第2図 鶴崎御茶屋跡位置図



第3図 発掘調査区位置図（上記赤線部右側）

3. 鶴崎御茶屋跡の立地・環境

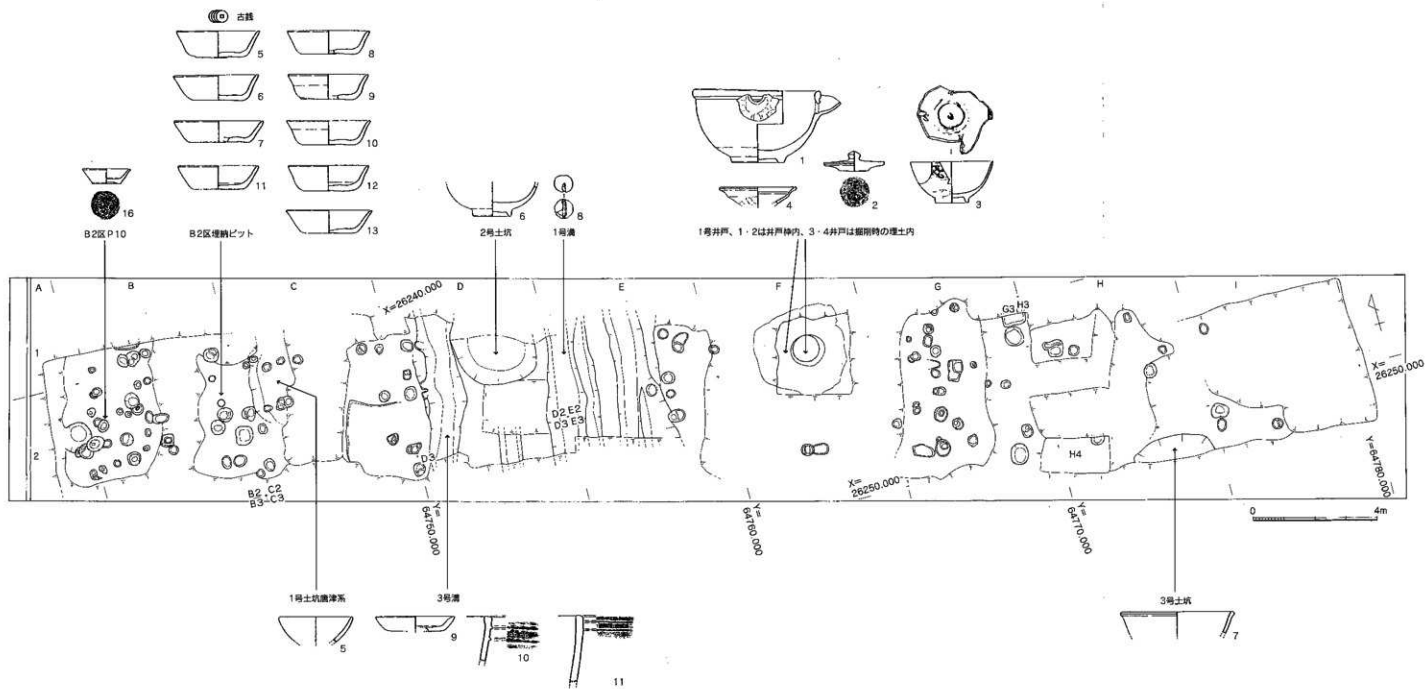
鶴崎御茶屋跡は大分県大分市南鶴崎3丁目5-1に所在する。

鶴崎御茶屋跡は大野川（本流）・大野川の分流乙津川に囲まれた三角州上に立地する。このような立地の為、基盤は砂層である。この三角州は、乙津川方面から海・大野川方面へ流れていた古流路の痕跡が幾筋か残っており、近代以前は独立性の高い砂洲であったようだ。このことを示すように幕末期の様子を描いた絵図を見ると幾つかの島から鶴崎地区は成りたっており、現在でも“小中島、家島”の地名が残る。尚、標高は現在の標高で4.50m、遺構検面の標高が2.50m付近である。

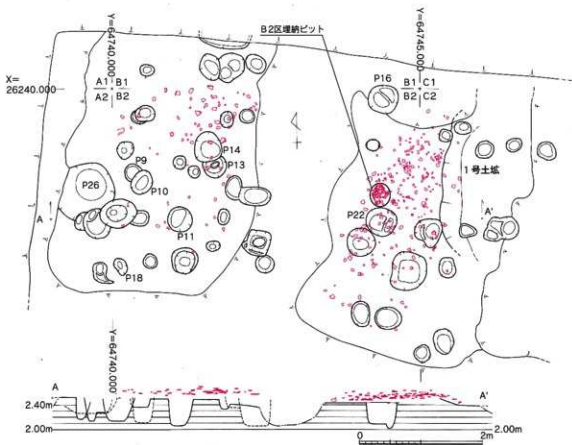
第2章 遺構と遺物

1. 遺構

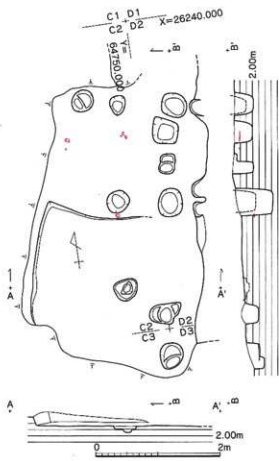
遺構は発掘調査区の全面に広がっていた（第3図）。とは言うものの、発掘調査区内の旧校舎の基礎部分によってあたかも細切れ状態であった。したがって遺構のうち、柱穴については建物として構造の判る例はなかった。



第4図 鶴崎御茶屋跡遺構配置図



第5図 B2区・C2区周辺遺構実測図

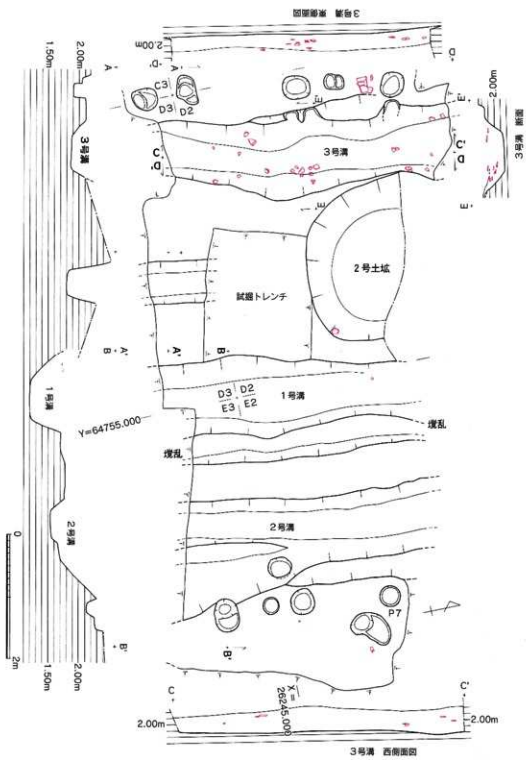


第6図 C2区東側・C3区西側遺構実測図

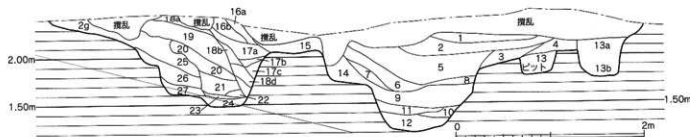
柱穴が最も多いのはA1区・A2区・B1区・B2区・C1区・C2区である(第4図)。ここは遺物包含層が15cm前後の厚さで堆積しており、これを割くと遺構の上面が出てくる。遺物の大半は京都系土師器と呼ばれるものであった。遺構の中に遺物が目立って流入しているわけではないが、B2区の土器密集部分は坏を重ねて埋納坑に埋納している。土器の中には古銭が紐を通した状況で見つかった(第5図)。

B2区とC2区に跨る部分にも柱穴と、L字状に掘り下げた部分があったが、その性格はよく判らない(第5図)。ここも遺物包含層の下で遺構が見つかり、遺物はほとんどない。

1・2・3号溝は南北方向に延びる溝で、それぞれ平行している(第7図)。1号の現状での幅が最大で1.75m、深さは0.55mである。2号溝は南よりの東側面が2段になっているところがある。また遺構の検出面も2号溝東側の肩部の標高が高い。ところが1号溝の西側肩部、2号溝の東側肩部を除く両溝間は、流入土・埋



第7図 D2・D3・E2・E3区周辺遺構実測図



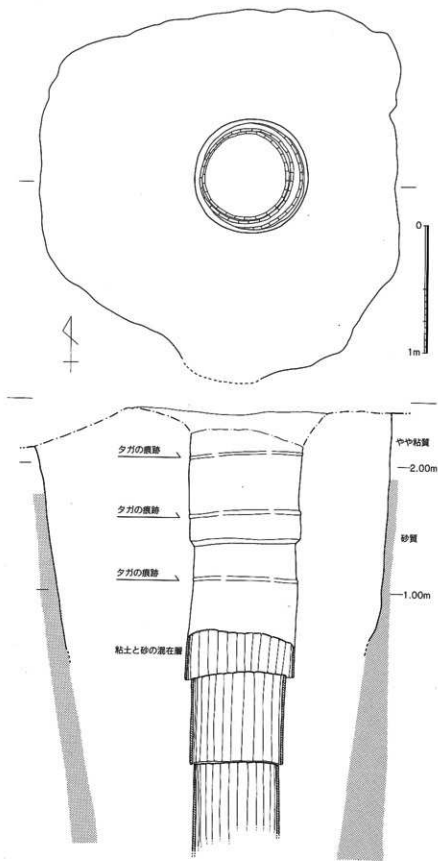
- | | | | |
|-------------|-------------|------------|-------------|
| 1. 暗黄褐色 粘質 | 14. 暗褐色 粘質 | 堆土及び、地山土若干 | 21. 暗褐色 粘質 |
| 2. 暗黄褐色 粘質 | 15. 暗褐色 粘質 | 黄色粘子若干 | 22. 暗褐色 粘質 |
| 3. 灰褐色 粘質 | 16a. 暗褐色 粘質 | 炭化物、白色粘若干 | 23. 暗褐色 粘質 |
| 4. 暗褐色 粘質 | 16b. 暗褐色 粘質 | 炭化物、白色粘若干 | 24. 暗褐色 粘質 |
| 5. 暗褐色 粘質 | 17a. 暗褐色 粘質 | 堆土、白色粘若干 | 25. 黒褐色 粘質 |
| 6. 暗褐色 粘質 | 17b. 暗褐色 粘質 | 堆土、白色粘若干 | 白色粒・褐色粘若干 |
| 7. 褐色 粘質 | 17c. 暗褐色 粘質 | 堆土、白色粘若干 | 26. 暗灰黄色 粘質 |
| 8. 暗褐色 粘質 | 18a. 暗褐色 粘質 | 白色粘若干 | 地山の土か? |
| 9. 暗褐色 粘質 | 18b. 暗褐色 粘質 | 白色粘若干 | 27. 暗灰黄色 粘質 |
| 10. 灰褐色 砂質 | 18c. 灰褐色 粘質 | | 28. 暗褐色 粘質 |
| 11. 暗褐色 粘質 | 18d. 暗褐色 粘質 | | 色塗層の土? |
| 12. 暗褐色 粘質 | 19. 黄褐色 粘質 | 白色粒・炭化物若干 | 1~12 1号溝埋土 |
| 13a. 暗褐色 粘質 | 20. 暗褐色 粘質 | 白色粒・炭化物若干 | 16~27 2号溝埋土 |
| 13b. 暗褐色 粘質 | | | |

第8図 1号溝・2号溝断面実測図

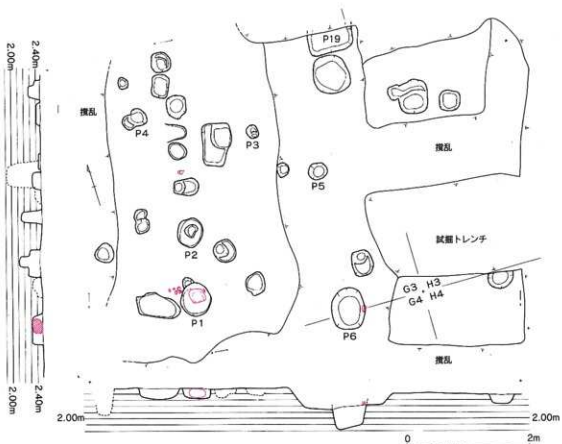
土があることから削られていない。この1・2号溝からは遺物はほとんど見つからない。遺構の堆積状況を観察すると、1号溝では既に東側から流入しているが、2号溝は明らかに東側からの堆積である。このうち2号溝の19層から24層までは人工的に埋めているとも思われる(第8図)。3号溝は上面が若干削平されていると思われるが、現状での幅が1.35m、深さが0.25mである。この3号溝は、溝内堆積物から20数点の遺物が見つまっている点が他の溝と若干違う。溝内底部の標高は、1号溝の最も深い部分で1.20m、2号溝が1.53m、3号溝が1.96m前後である。1号溝と2号溝は溝間の幅がほぼ一定であることから、両溝はその存在を意識した上での計画的な掘削が読み取れる。

2号土坑は直径が2.60mと推定される。深さ1.50mまで掘り進んだが、崩落の危険性からそれ以上の調査を断念した。おそらくその規模から井戸と考えられる。また2号土坑は、1号溝と3号溝の間にあるが、遺構の検出段階での切り合い(前後関係)は観察できなかった(第7図)。

1号井戸はF2区に位置する。周囲は基礎工事のために著しく攪乱されていた(第4図)。井戸の掘り方の平面形は、方形に近い不整形となっている(第9図)。井戸の掘り方検出面付近の最大幅は、2.35mであるが、これに対し深さ3.50m付近での推定最大幅は1.90mである。このように井戸掘削坑の断面形は逆台形となっている。これは遺構検出面から、深さ0.50mまでの堆積土が粘質土であるが、それ以下が砂であることと関係していると思われる。つまり掘削中における崩壊を防ぐ意味もあったのであろう。井戸の枠と穴の位置は、掘り方のほぼ中央に設定されている。井戸枠は、木の板を桶のように組むが、底板のない筒であることに特徴がある。この筒を井戸坑内の下から4段にして構築している。その方法は、まず井戸枠の直径が最も小さい0.68mの枠を設置し、その外側を砂で埋める。次に、井戸枠が最初のものより若干大きい0.74mの枠を最初の枠の外側に嵌め込み、その外側を砂で埋める。このような作業を4段にわたって繰り返している。あたかも4段の望遠鏡を延ばした状況に似ている。標高0.

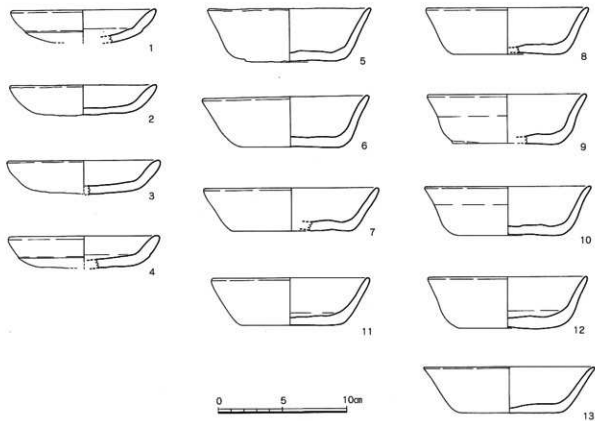


第9図 1号井戸実測図



第10図 G3・H3区付近遺構実測図

※P6が古墳時代前期の土坑



第11図 土師質土器実測図 ※5～13はB2区埋納ビット

75mこの付近が帯水層の上限であったようで、この部分から標高-2.00mまで残っている。標高-2.00m付近が、井戸枠の底部ということになる。帯水層より上の圧痕を観察すると、竹の篋がよく残っている。1号井戸からは、井戸構築時の埋土内、井戸廃棄時の井戸枠内埋土から陶磁器を中心とした遺物が見つかった。

柱穴はG2区、G3区、H3区付近にも多い（第4図、第10図）。その状況を見ると、擾乱を受けずに残って残った部分に遺存しているとみられ、本来は更に広い範囲に分布していたようだ。また、G列の南北方向に柱穴が並列する部分があり、建物の一辺を構成していると思われるが、詳らかでない。G3区の南側にP1という遺構番号をつけた柱穴があるが、中世末の柱穴でしばしば見られる礎石を組み合わせている。これは、約20cm程の浅い穴を掘り、石皿状の石を設置している（第10図）。

2. 遺物

遺物の年代は、古墳時代・中世・近世に属するものが見つかった。なかでも中心となるのは、安土桃山時代末から江戸時代初頭にかかる遺物が主体となっている。最も多かったのは、B2区、C2区での遺構面直上の包含層から見つかった京都系土師器と呼ばれるものである。3号溝で見つかったものも若干あるが、そのほとんどは既に記述したようにB2区、C2区で見つかった。しかもそれらの全てが小破片で、推定で4分の1以下の大きさの事例がほとんどで、完全な形を保ったものはなかった。

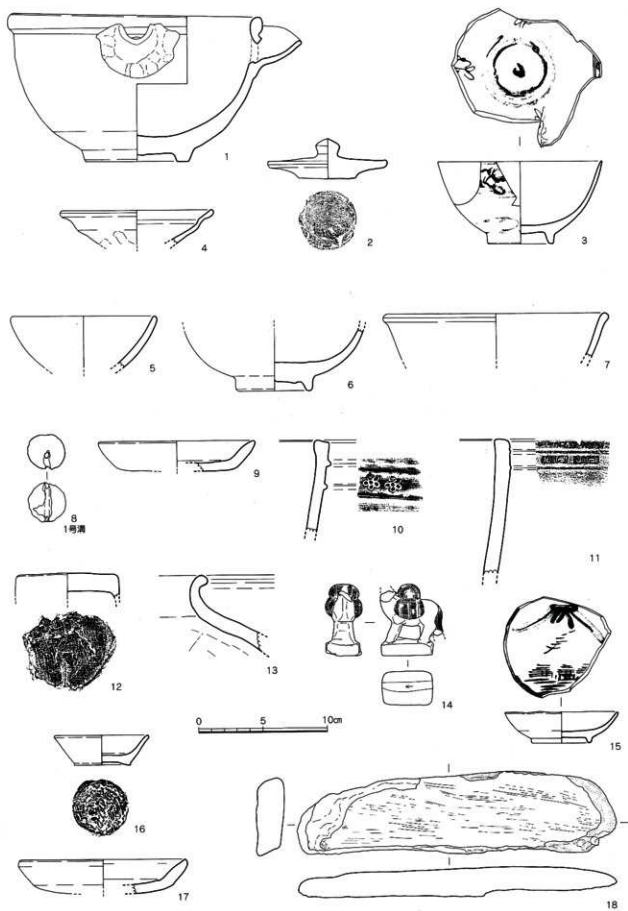
京都系土師器は概ね2種類に区分できる。一つは手すくねで成形し、外方に傾く口縁端部を丸く納めるもので、外面の下方に稜を有する例である（第11図1・4、第12図17）。二つ目は外面に稜を有しないほかは上の例と同じ特徴の例（第11図2.3、第12図9）。これに加えて、口縁の内面側に傾斜する面と稜を有する例も若干ある。いずれにしても、これらの特徴を塩地洞一の京都系土師器編年表に照らし合わせると、第4期で16世紀末から、17世紀初頭の例に相当する（塩地1999）。

B2区埋納ピット

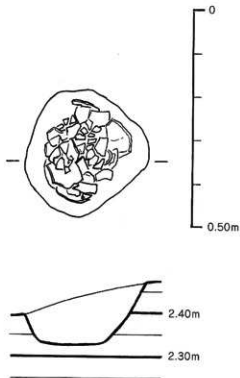
箱形の坏は9個体以上が内面の見込み部を上にして、柱穴状の小穴に折り重なるように埋納されていた（第13図）。その土師器の中より紐を通した状態で28枚の宋銭が見つかった（第4図）。銭種は中世の所謂備前銭埋納遺構から大量に見つかるものと若干異なり、本来多い銭種が少量であったり、本来微々たる量の銭種がわずかながら含まれている（巻末図版5）。詳細は写真図版に示すとおりである。この埋納坑が見つかった場所は、前述した京都系土師器が大量に見つかったB2区である。また箱形坏の法量は口縁の直径が約13cm~14cm、器高が約3.5cm~4cmの間にあり（第11図5~13）、器形の特徴は、胴部・口縁部が外形しながら直線的に延び、端部を先細りに丸く納めている。底部は糸切り離しである。こうした器形は、15世紀代の例に極めて類似する。この埋納遺構の上位の包含層からは京都系土師器が見つかったが、隣接する柱穴群には流入していない。埋納遺構の年代感から、柱穴は15世紀代の可能性が高い。埋納ピットの周囲にあるB2区・C2区の他の柱穴から京都系土師器は見つからない。唯一B2区の埋納ピットから土師器が見つかった。したがって他の柱穴は京都系土師器の年代ではなく、15世紀代の可能性が大きい。

1号井戸出土の遺物

陶磁器 筑前高取焼の片口の鉢と水差の蓋が1号井戸枠内埋土中から見つかった（第12図1・2）。蓋と片口の鉢は埋土の最上部に隣接して見つかったが、後者のパーツである小破片は井戸枠内の最深部の埋土中からも見つかった。片口の鉢は、底部が幅広の削り出し高台で、胴部が丸く内湾しながら立ち上がり、口縁の外側を玉縁とする。内面全域と外面の大半に暗緑色の釉薬がかかる他、釉だまりや釉垂の部分が乳青白色となっており、風雅な鉢となっている。こうした特徴を有するものは高取焼の内ヶ磯窯遺跡などに類例があり、高取焼のなかでも宅間窯に僅かに選れている。その制作年代



第12図 陶磁器・その他の遺物実測図



第13図 B2区埋納ピット(巻末図版4参照)

詳細は詳らかでない。なお胴部内面の紋様は折枝花紋の可能性がある。この碗の時期として小野正敏は、染付碗F群として16世紀末の文禄・慶長頃から17世紀初頭の元和段階以降にまで及ぶ位置付けをしている(小野1982)。

3号溝の遺物

瓦質土器—火鉢 2例あり、いずれも口縁部付近の小破片である。一つは色調が灰色をしたもので、突出した2条の突線を横方向に廻らせ、その間に花紋を押圧する(第12図10)。花紋は、五花紋を隔刻した施紋具を押しつけることで、陰刻の施紋する。こうした押型は2個を単位としている。もう1例は茶褐色をした例で、やはり横走る突線間に方面の雷紋を前例と同様な方法で施紋する(第12図11)。やはり前例と同様に2個ずつの単位としている。本例は並列する雷紋からみて「豊後府内型火鉢」の可能性が高い。いずれも17世紀初頭に位置付けられる。

京都系土師器—皿 段を外面にもたない手ずくねで成形している。上述したB2区・C2区の京都系土師器と同様の特徴を持っている(第12図9)。

その他 瓦質の甕があるが、はっきりした位置付けができていない(第12図13)。上記の例と同様に17世紀初頭前後のものであろうか。焼壺壺の蓋も出ているが、3号溝に擾乱坑が接している部分でもあり、信頼度は低い(第12図12)。

その他の遺構の遺物

C2区で京都系土師器が見つかった包含層上面から掘り込まれた1号土坑からも唐津系陶器片が出ている(第12図5)。これは黄土色をした碗で、内外の表面に間入がいつている。2号土坑からは青磁が出ている(第12図6)。これは見込み部分に釉葉がかきとられた部分のある特徴的なもので、15世紀代明の作風と思われる。3号土坑からは青磁が出ている(第12図7)。16世紀代のものであろう。B2区のP10からは小皿が出ている(第12図16)。これは口縁部径7.4cm、器高2.4cmの法量で、底部が糸切り離しである。灯明皿として用いられたようで、煤がついている。15世紀後半代のものであろう。

は1600~1620年代とされている(副島邦弘2000)。

陶磁器—皿 1号井戸掘削時の埋土内から見つかった唐津焼の皿がある(第12図4)。口径が12.2cmの小型の皿で、体部が緩く傾斜し、上方に段をとるように形成する。なお口縁部も丸く納めている。佐賀県の市ノ瀬高麗窯・大草の窯などにある。製作は、盛峰雄によれば1594~1610年代に相当するようである(盛峰雄2000)。

陶磁器—染付付碗 1号井戸掘削時の埋土内から見つかった中国明代の碗である(第12図3)。器形は、腰から胴にかけて全体的に丸みをもっている。高台は外開きとなり、壘付の軸をとらずに珪砂敷の上で焼かれている。高台内は兜巾状に削られ、全体に施釉されている。文様は、胴部外面に唐草紋を廻らせている。口縁部外面、胴部内面、見込み部分にも紋様が見られるが

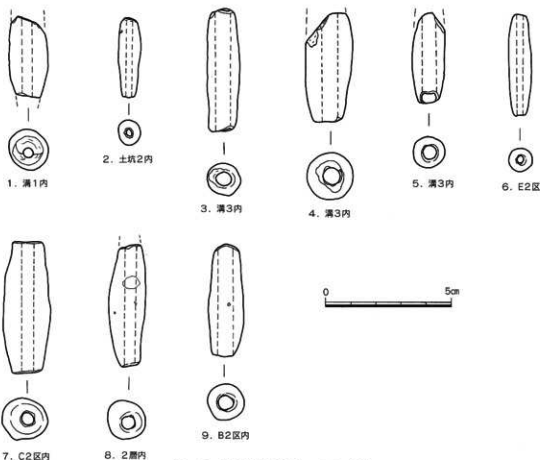
第1表 陶磁器及びその他の製品の観察表

(吉田寅作)

押印番号	出土地点	遺物番号	器種	胎土	色	陶	成	形	測		口径	器高	底径	備考
									内	外				
11B1	B2区	B2区-7, 8	陶磁	赤褐色	赤褐色	手づくね	手づくね	手づくね	11.6	2.7			京都系土師	
2	B2区	B2区-39, 107	砂粒少ない	赤褐色	赤褐色	手づくね	手づくね	手づくね	11.6	2.4	6.4		御杖系、京都系土師	
3	B2区	B2区-40, 73	陶磁	赤褐色	赤褐色	手づくね	手づくね	手づくね	12.2	2.2			京都系土師	
4	B2区	B2区-83, 85	陶磁	赤褐色	赤褐色	手づくね	手づくね	手づくね	12.0	(2.5)			京都系土師	
5	B2区埋納	B2区-71	坏	橙色	赤褐色	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	12.6	4.25	7.4		回転糸切り、板状圧痕、右回転	
6	B2区埋納	B2区-71	坏	赤褐色	赤褐色	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	13.2	4.0	8.0		回転糸切り、板状圧痕	
7	B2区埋納	B2区-71	坏	灰石、赤	赤褐色	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	(13.8)	3.4	(9.4)		底面回転糸切り、板状圧痕	
8	B2区埋納	B2区-71	坏	灰石、赤褐色	赤褐色	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	(12.8)	3.6	(8.6)		底面回転糸切り	
9	B2区埋納	B2区-71	坏	赤褐色	赤褐色	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	(12.5)	3.9	(8.6)		底面回転糸切り	
10	B2区埋納	B2区-71	坏	灰石	赤褐色	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	(13.2)	3.8	(8.4)		底面回転糸切り、板状圧痕	
11	B2区埋納	B2区-71	坏	赤褐色	赤褐色	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	(12.5)	3.7	8.0		底面回転糸切り、板状圧痕	
12	B2区埋納	B2区-71	坏	赤褐色	赤褐色	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	(12.6)	4.0	8.0		回転糸切り、板状圧痕	
13	B2区埋納	B2区-71	坏	赤褐色、橙褐色	赤褐色	ロクロ	ロクロナデ	ロクロナデ	(13.5)	3.6	8.5		回転糸切り、板状圧痕	

押印番号	出土地点	種	類	材	口径			底	形	装			製作	年代	備考
					口径	器高	底径			内	外	見			
12B1	1号舟形	陶	器	片口の鉢	20.0	10.8	8.1	ロクロ	口				高	1600-1620	内+襷
2	1号舟形	陶	器	水差の蓋	9.3	3.2	4.5	ロクロ	口				高	1600-1620	内+襷
3	1号舟形	陶	器	碗	12.8	6.35	5.1	ロクロ	口	底、自然釉	底の灰?	磨草紋	高	1600-1620	中国の形、1号舟形
4	1号舟形	陶	器	皿	12.1			ロクロ	口	底、自然釉	底の灰?	磨草紋	高	1600-1620	中国の形、1号舟形
5	1号土坑	陶	器	碗	11.5			ロクロ	口	底、自然釉	底の灰?	磨草紋	高	1580-1610	北ノ原系土師、大寺溝
6	2号土坑	陶	器	碗			6.0	ロクロ	口	青磁		輪割	明	15C	赤土色、圓人
7	3号土坑	陶	器	碗	17.6			ロクロ	口	青磁		輪割	明	15C	京都系土師
9	3号土坑	土師	器	蓋	12.3	2.4	9.0	手づくね							不明
10	3号溝	瓦	質	火鉢				ロクロ							16C末-17C前半
11	3号溝	瓦	質	火鉢				ロクロ							16C末-17C前半
12	カケラン	土師	器	蓋	8.1										在坑? 蓋後内型
13	3号溝	瓦	質	蓋											大塚? 虎造の蓋
14	カケラン	土師	器	蓋											19C
15	カケラン	土師	器	蓋	8.8	2.4	4.4								19C前半
16	B2区+埋納	土師	器	小	7.4	2.3	4.3								15C後半
17	包含層	土師	器	蓋	13.0	2.8									回転糸切り、赤い斑点、スス

※土師・右製品は省略した。()は復元



第14図 鶴崎御茶屋跡内からの土鏡

第3章 まとめ

鶴崎地方は1592年(天正20年)に大友氏が除国になって以後、1594年(文禄3年)には府内藩早川長敏の預地となる。その後、1601年(慶長6年)に肥後藩の加藤清正領になるが、この際に地域支配の拠点が既に形成された可能性が高い。1618年(元和4年)、加藤忠広によって鶴崎は御茶屋を城に見立てた城下町形式に地割がされた。1632年(寛永9年)から、肥後藩を加藤氏から継いだ細川氏の領地となる。細川氏は1633年(寛永10年)から1635年(寛永12年)まで検地を行い、あわせて再開発を行った。

鶴崎御茶屋跡から発掘によって見つかった遺物は、大きく三つの時期に区分できる。

すなわち最初は鶴崎御茶屋跡形成以前の段階。2号土坑・3号土坑から見つかった青磁類が15・16世紀代のものと、15世紀代のB2区埋納ピットとB2区P10の土師器がこれにあたる。埋納ピットの土師器に関してはほとんど15世紀代のものとして間違いなく、しかも周囲の柱穴からは京都系土師器が見つかっておらず、埋納ピット・B2区P10と同じ年代の可能性が高い。ともかくこれらの遺物が鶴崎御茶屋以前とすると、中世大友氏が覇権を確立していた頃の中世高田庄の遺構に関わる遺物と考えられる。つまり野津氏系吉岡氏は16世紀に鶴崎に進出しているので同氏に関連するものではない。

二つ目の時期は、16世紀終末から1615～1623年までの元和年間の遺物である。1号井戸掘削時の埋土に含まれていた染付碗は、16世紀末からの文禄・慶長年間、更に17世紀初頭に流行した碗であるし、あるいは1号井戸枠内埋土内からの高取系の片口の鉢・水差しは1600～1620年に作られたことが判っている。このことから1号井戸は掘削されてから埋められるまで、利用されたのは最長で20年前後だったということになる。したがってこの井戸は加藤氏段階に掘削され、遺物は肥後藩加藤氏改易時までの若干の伝世を考慮に入れると、井戸としての機能を停止する埋め戻しを行ったのは細川氏への領地移管後の再開発に伴う造成時の可能性が高い。

京都系土師器については16世紀終末～17世紀初頭の位置付けができることから、これも加藤氏段階の可能性が高い。しかしこの京都系土師器は儀式に使われるものとされているもので(吉田 寛1997)、故意にバラバラの小破片にして廃棄密集分布したと考えられることもあり、加藤氏改易時の1632年(寛永9年)まで下げて考える必要はないだろう。

3号溝からは16世紀終末からの瓦器や上述の京都系土師器が溝底部付近から出ているが、溝内の土は流入土であって、埋土ではない。やはり加藤氏段階の時期に取まるものであろう。3号溝から見て1・2号溝は東側に若干離れているが、平行して掘削されていることから全く無関係ではなく、互いの溝の位置を考慮のうえ掘削したことが考えられる。したがって、1号から3号までの3条の溝は近接した時期であろう。ただ1号溝内の堆積土のなかには、土塁の痕跡、または埋土と思われる部分もある。人為による埋土であれば細川氏が入って来た際の再開発に伴う整地の可能性がある。これらの溝は防御施設である堀の規模とは比較にならないもので、屋敷を区画する溝、排水溝の可能性もあろう。あるいは加藤清正が鶴崎にきた当初の臨時的な防御施設の可能性も考えられる。いずれにしても、絵図に示された細川段階の御茶屋遺構であると明確にいえる遺構はない。

三つ目の時期は1632年(寛永9年)以降の細川氏段階に関わる遺物である。この時期の遺構は削平され、ほとんどない。唯一C2区にある1号土坑が相当しよう。

参考文献

- 小野正敏 1982「15,16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第2号、日本貿易陶磁研究会、pp.71～87
堀地潤一 1999「九州出土の京都系土師器Ⅲ」『中近世土器の基礎研究』XIV・日本中世土器研究会
副島邦弘 2000「上野・高取」『九州陶磁の編年』九州陶磁学会pp.314～335
盛 峰雄 2000「陶器の編年—1.碗/皿」『九州陶磁の編年』九州陶磁学会pp.10～33
吉田 寛 1997「たそがれの太友時代」『大分・大友土器研究』第16号大分・大友土器研究会pp.1～2



写真1 発掘区全景 西から



写真2 発掘区近景 東から



写真3 発掘調査風景



写真4 発掘調査区近景

卷末図版 2



写真5 左2号溝、右1号溝
北から

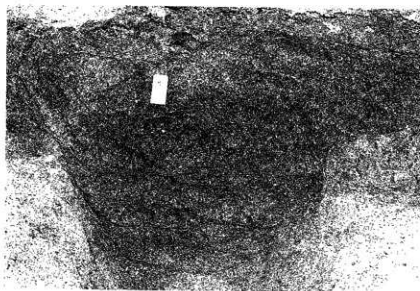


写真6 1号溝南側断面

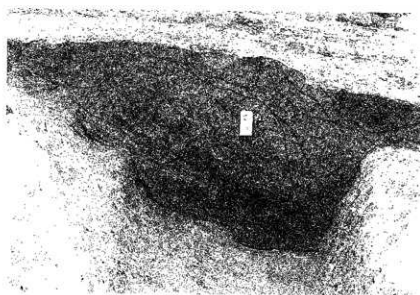


写真7 2号溝南側断面



写真8 3号溝と2号井戸

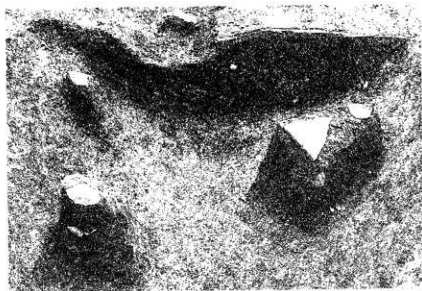


写真9 3号井戸の遺物出土状況

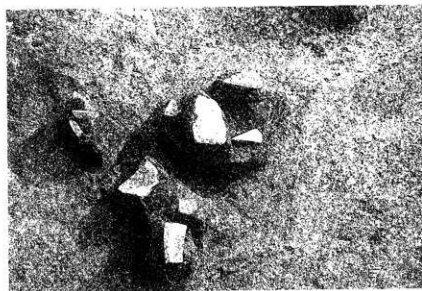


写真10 3号井戸の遺物出土状況

卷末図版 4



写真11 B2区土師器埋納ビット
古銭が見える。周囲は京
都系土師器。

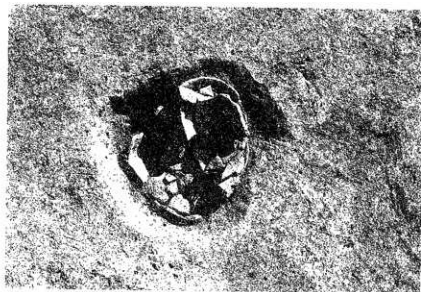


写真12 B2区土師器埋納ビット
上段写真のクローズ・ア
ップ。15世紀の土師器を
重ねていた。



写真13 1号井戸の完掘状況



開元通寶
唐・初鑄621



太平通寶
北宋・初鑄960



淨化元寶
北宋・初鑄990



建通元寶
北宋・初鑄1004



天聖元寶
北宋・初鑄1023



天聖通寶
北宋・初鑄1023



建通元寶
北宋・初鑄1034



肅通元寶
北宋・初鑄1038



肅通元寶
北宋・初鑄1038



肅通元寶
北宋・初鑄1038



肅通元寶
北宋・初鑄1038



肅通元寶
北宋・初鑄1038



肅通元寶
北宋・初鑄1054



建通元寶
北宋・初鑄1056



治元元寶
北宋・初鑄1064



顯元元寶
北宋・初鑄1068



顯元元寶
北宋・初鑄1068



顯元元寶
北宋・初鑄1068



元豐通寶
北宋・初鑄1078



元豐通寶
北宋・初鑄1078



元豐通寶
北宋・初鑄1078



元豐通寶
北宋・初鑄1086



元豐通寶
北宋・初鑄1086



元豐通寶
北宋・初鑄1086



治元元寶
北宋・初鑄1094



治元元寶
北宋・初鑄1094



治元元寶
北宋・初鑄1101



治元元寶
北宋・初鑄1111



治元元寶
南宋・初鑄1174



治元元寶 (背四)
南宋・初鑄1201

写真14 鶴崎御茶屋跡出土銭X線写真 (S=1/1)

別府大学文化財研究所 (本田光子・志賀智史)

B2区埋納ヒット

報 告 書 抄 録

フリガナ	ツルサキオチャヤアト
書名	鶴崎御茶屋跡
副書名	大分県立大分鶴崎高等学校普通教実棟改築に伴う調査
巻次	—
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	第133輯
編者者	綿貫 俊一
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-0021 大分県大分市府内町3-10-1
発行年月日	2002年3月29日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ツルサキオチャヤアト 鶴崎御茶屋跡	大分県大分市 南鶴崎 3丁目5-1	22	322180	33°14'11"	131°41'42"	平成13年 1月9日 ～ 平成13年 2月13日	315m ²	校舍改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ツルサキオチャヤアト 鶴崎御茶屋跡	役所跡	室町時代 安土・桃山時代 江戸時代	溝 3条 土坑 3 井戸 1 柱穴 多数	青磁 染付 土師器 京都系土師器	17世紀初頭頃の加藤氏による鶴崎御茶屋跡の遺構

大分県立人分鶴崎高等学校普通教室棟改築に伴う調査

鶴崎御茶屋跡

大分県文化財調査報告書 第133輯

平成14年3月29日

発行 大分県教育委員会
大分県大分市府内町3-10-1

印刷 佐伯印刷株式会社
大分県大分市古国府1155-1